

【研究ノート】

感性の原理

平嶋 一臣

Principle of KANSEI
By
Kazuomi HIRASHIMA

キーワード：KANSEI, 感性, 感覚, 表現

1 序論

「東京では培えない価値観や感性を身に付けたかった」¹⁾「……勉強はどんな場面で効くのか？ の問いには、『感性』を身につけるために……という答えが返ってきました」²⁾

「夏らしさをテーマに、都会の女子高生の感性豊かな日常が描かれる」³⁾「子供一人一人の感性に対処するには、大変なエネルギーが必要である」⁴⁾ここで新聞記事や冊子中に見られる「感性」を読者はどう理解し、読み進めているのであろうか。

「感性」。一見分かり易いようだがよく考えてみると、その意味するところは不明瞭な曖昧な日本語であるため疑問を持った。

ここでの話者の意図は「感性」を「感覚」「感情」「個性」「ひらめき」のような意味で使いたかったのだろうか、聞いている側にとって、その点が何とも不安である。と同時に、当事者間においては、この「感性」を何となく分かったような気になり、それで済ませているのではなかろうか。

日本語として使われている「感性」が、どのような意味を持ちどう伝えたくて発している言葉なのか、明らかにしたいと考えた。「感性」の語意あるいは「感性」という言葉を曖昧なままにしていると、たとえ「感性」の重要性を話者が説こうが、言葉を受け取る側にとっては、この語が何を意味するのか、正確には解らないからだ。

冒頭では、4つの場面を取り上げたに過ぎないが、実は使用している「感性」の場は、さらに広がりを見せている。と同時に曖昧さを秘めたままこの言葉が素通りしている点も否めない。

「感性」とは現実にナマの言葉として使われる場面が多いだけに、この言葉の裏には、具体的な活動場面や世界が潜んでいるはずだ。その具体的なシーンを取り上げつつ、この日本語の持つ意味をはっきりと理解し、今後の「感性」という言葉の使用に注意を払いたい。それには、いくつかの授業事例を基に、「感性」語の意味を確かなものとする、具体的な場面から探していく方法を探りたいと考えた。この方法を採用することにより、これまで曖

受理日：令和2年11月27日

純真短期大学こども学科特任教授・純真学園大学客員教授

味なまま使用してきた「感性」の意味あるいは本質が見えてくるはずだ。

2. 本論

「感性」の持つ意味・「感性」の表われている姿・「感性」の本質（原理）を追及する手立てとして 以下、これら6項について順を追って説明・検証していく。

- 1) 「感性」の先行研究および一般的な解釈（説明）
- 2) 「感性」の類似語
- 3) 「感性」の英語訳
- 4) 仮説
- 5) 仮説検証のための授業
- 6) 仮説の検証結果

1)「感性」の先行研究および一般的な解釈(説明)

「感性」を直接的に説明しているのは、これまでに私の知り得るかぎりにおいては、次の15例に表われている。アンダーライン部分は、それぞれの研究者が、「感性」または「感性」の語意にと考えている箇所である。

- (1) 悟性的な認識の基盤を構成する感覚的直感表象を受容する能力であり、悟性とは感覚が認識として現れた姿である⁵⁾
- (2) 直感的にものごとの価値や本質・心情などを感じ取る力。すなわち、価値の感受性である⁶⁾
- (3) 感覚プラス感情が感性⁷⁾
- (4) 今、この瞬間の感覚情報を認識する能力⁸⁾
- (5) 環境世界と自己の身体との交感能力であり、また同時にその交感の適切性について把握する能力⁹⁾
- (6) 価値あるものに気づく感覚¹⁰⁾
- (7) 感覚的な刺激を直感的にとらえてそれに反応する能力の意で、改まった会話や文章に用いられる漢語。同じ人間でもその方面によって感受性の鋭さが違う場面があるが、この語は「知性」と対立するものとして個人単位に感覚を総合的にとらえた印象があり、受動的な感覚だけでなく能動的な働きをも含む¹¹⁾
- (8) 感受性によってとらえられた外界の情報を、生命と身体の安全とのかかわりで「見わけ」「身分ける」直観としての認識、判断力である¹²⁾
- (9) 価値あるものに気付いたり、感じたものに心を寄せたりして、自分なりにそのものと一体化しようとする感覚¹³⁾
- (10) センセーション。体験を通して実感し、意味や価値に気づく能動的な働きであり、感覚である¹⁴⁾
- (11) 自然や社会環境に自ら働きかけたり、環境から感じ取ったりする相互作用（経験、体験）を通し、自己を改造し成長していく総合作用において、主体である個人が、五感による刺激から、環境や対象の価値や性質に気づいたり、感じたりして、選択的に反応し、識別する感覚、もしくは、感覚にともなって起こる感情¹⁵⁾

- (12)EQ。外物に応じて感じたり、心が動く能力・性質¹⁶⁾
- (13)「感性」について、厳密な定義は不必要。子どもの感じ方を重要視する指針が明確になればよい¹⁷⁾
- (14)さまざまな対象や事象から良さや美しさなどの価値や心情を感じ取る力。「見る」「感じる」「表現する」ことを、繰り返し体験することにより育つ¹⁸⁾
- (15)美や善などの評価判断に関する印象の内包的な意味を知覚する能力¹⁹⁾

これら 15 例（学会・研究会・文科省見解・メディアを含む）の「感性」語の解釈を総合的に眺めると、「直感」「感覚」「感情」「感受性」を中心とした解釈をもっている。中に一つ、(9)の小川氏の解釈の中に、感性の要素の一つに「表現する力」を加えているところは他者との解釈の違いを見ることができる。

次に、一般的な辞書では「感性」をどのように説明しているかについて眺めてみる。

- ① 外界からの感受能力で理性より下位とされる。物事に感じる能力、感受性²⁰⁾。
- ② 外界の刺激に応じて感覚・知覚を生じる感覚器官の感受性。感覚によってよび起され、それに支配される体験。したがって、感覚に伴う感情や衝動・欲望をも含む。理性・意志によって制御さるべき感覚的欲望。思惟の素材となる感覚的認識²¹⁾。
- ③ 対象からの刺激を感じ取る直感的な能力²²⁾。
- ④ 外界の刺激に応じてなんらかの印象を感じ取る、その人の直感的な心の働き²³⁾
- ⑤ 印象を受け入れる能力。感受性。また、感覚に伴う感情・衝動や欲望²⁴⁾。

2)「感性」の類似語

次に、「感性」との関連語・類似語を考えてみたい。これまでの研究者や辞書の中における「感性」の説明との関連で、頻繁に出てくる「感覚」「感情」「情緒」「情動」「衝動」「情操」についても触れておきたい。

- (1)感覚・・・目・耳・鼻・皮膚・舌などで、身体の内外から受けた刺激を感じとる働き。また感じとった色・音・におい・温度。
光・音や機械的な刺激などを、それぞれに対応する感覚受容器によって受けたとき、通常経験する意識現象。視覚・聴覚・味覚・嗅覚・触覚などがある。
物事を感じ捉えること。また、その具合。「美的—」「—が古い」
- (2)感情・・・喜んだり、悲しんだりする心の動き。気持ち・気分「～を顔に出す」「～を害する」「～を込めて歌う」「美しい」「感じが悪い」など対象に関するものと、「快い」「不満だ」など主体自身に関するものがある。一時的なものが情動。持続的なものが気分)。
物事に感じて起こる気持。「感情を害する」精神の働きを知・情・意に分けたときの情的過程全般をさす。情動・気分・情操などが含まれる。「快い」「美しい」「感じが悪い」などと言うような、主体の状況や対象に対する態度あるいは価値付けをする心的過程)。
- (3)情緒・・・折にふれて起るさまさまの情。情思。また、そのような感情を誘い出す気分・雰囲気。(心)情動に同じ。

- (4)情動・・・(心) エモーション 怒り・恐れ・喜び・悲しみのように、比較的急速にひき起こされた一時的で急激な感情の動き。情緒。
- (5)衝動・・・インパルス つきうごかすこと。反省や抑制なしに行動すること。また、その際の心の動き。「一的」「一にかられる」。
- (6)情操・・・知的なもの、美的なものに向かう高度な感情。情操は、前提として知識などの蓄積を必要とする。主体性を失っている情動とは反対の位置。

3)「感性」の英語訳

仮説設定の関連で私が避けて通ることができないものに「果たして『感性』の英訳は存在するか」を考えておく必要がある。というのも、昨今、マスコミを中心としたさまざまなメディア媒体でも、「感性」をいとも簡単に英訳した言葉で使用している事例を見受けるからだ。「センス」「フィーリング」「エモーション」「インプレッション」「インスピレーション」などである。

これらについても触れ、日本語の「感性」と比較することで、日本語でいう「感性」の意味をより明瞭に解釈できると考えるからだ。

- (1) sense・・・the power to feel (感覚・勘・思慮・分別・物わかり・意向)
※sensibility (感性・感度・感受性・敏感・過敏) sensibility を英英辞典で調べると (the ability to feel or perceive 感動や知覚・感知・わかる・気づく能力) とある。
※力) とある。 知・わか (感性・感度) sensitivity を英英辞典で調べると (the state of being sensitive (感じやすい・敏感な・すぐ気にする状態) とある。
- (2) feeling・・・the sense of touch (触感・感覚・知覚・感受性)²⁹⁾
- (3) emotion・・・a strong feeling of any kind (情動・感情・感動)²⁹⁾。
- (4) impression・・・an effect produced on the senses (印象・感銘・感動・感じ・考え・感想) ※impressionability (感受性) ※impressionism (印象派・印象主義)²⁹⁾。
- (5) inspiration・・・a sudden brilliant idea (突然のひらめき)²⁹⁾。
※a stimulus to creation in art, music, literature (絵画・音楽・文学を創造するための刺激・興奮) an influence from God (神の威光・影響・感化・啓示) つまりこれらを総合すると「第六感・瞬間的な思いつき・直感的なひらめき」となるだろうか
※inspire=ひらめきを与える (V) の名詞形。

これらの英語訳を一覧すると、(一部に「感性」そのものと翻訳している語もあるが) いずれも「感覚器官」を中心にした「感受」の状態を英語で説明していることが分かる。この英語訳の考え方と「日本語における『感性』の使われ方」とを比べると、そこに大きな違いを見る。上記5個の英語訳では、日本語の「感性」を、完全に言い表せておらず、そこ英訳語の限界を感じている。

日本語で言い表したい場合の「感性」には、感受した後、何らかの手段や行動をもって「表現」する姿を内包している。したがって、私は日本語で「感性」を、英語訳する場合にもそのまま「KANSEI」と表記するほかはないと考える。

4) 仮説

「感性とは、感覚を総合させた気づきを感情豊かに表現することである」

これまでの「感性」研究の過程で、私はその定義を次のように変えてきている。

- (1)人間の持つ感覚の総合により、外界からの刺激を感じる自分を、客観的に気付くこと。
また、そのプロセスにおいて、感情が「発展的」「健康的」「美的」に高まり、自己に生産的発展的価値をもたらすもの。
- (2)自然と社会の環境に、自ら経験・体験を通し働きかけ、自己を現在よりもさらに成長させていく総合的な作用。主体である個人が、五感による刺激から、環境や対象の価値や性質に気づいたり感じたりし、そこから選択的に反応・識別する感覚、または、感覚にともなって起こる感情。
- (3)ヒトの持つ最下層感覚・下層感覚・中層感覚さらに上層感覚の充実を図り、その総合力により、外界をより確かに感じ取る自分に気付くこと。
- (4)自己の感覚を総合し外界を感じ取る自分に気付くこと。

これまでさまざまな学説を紹介してきた「感性」の説明には、明快なものが見当たらず納得できずにいた。つまり、「感性」の語意解釈がなされないままになっていることに気づかされ、改めて「感性」の語意を通してその原理に近づきたいと考えた。

ここで、本年より「気づき」に「表現」を加えている。これは、前段での英語訳の不備とも関連するが、日本語における「感性」語の現実（生活）場面での使われ方には、「表現」の場面を内包もしくは想定し、使用している場面が強いと考えるからだ。

そこで、私の行っている大学での授業実践の中から、学生が具体的に五感で気づきさらにそれをベースに新たな表現を行っている場面を取りあげることによって証明したい。実践を重ね実例を挙げ、その総合化の中にこそ「原理」が潜んでいると私は考えているからだ。

次節では、その実践の中から3例を採りあげ私の考える「感性」の「原理」に迫りたい。

5) 仮説検証のための授業（「感性」の表れ、と呼びたい具体的授業3例）

(1)『完成法』を試み、俳句の創作を誘導する

大学・短大で『国語表現』『人間学』『教育方法』『感性学』を担当している。そこでは必然的に、授業に向けた教材探しや具体的な勉強の仕方を手探りすることになる。そこで最終的に行き着くのは、どの学生も可能な限り自己に忠実なナマの言葉で、毎時の課題レポートを（私や仲間に向けて）発信してほしいということになる。

とはいえ、我々の学生時代と違い、ヴァーチャル世界の席卷とそれに反比例するかのよ様なアナログ世界の衰退の渦中にある若者にとって、90分間、鉛筆を片手に思考させるのは厳しいものがある。私の授業では、折々に「書く」作業を挟みつつ、最終的には800～1000字程度のレポートを提出させるのだが、この作業は、学生たちにとってかなりの負担を強いているようだ。と、ここまで考えが至ると、今後の授業方法をさまざまな角度から見直さざるを得ないことにもなる。私の方から何らかの教材刺激を提示し、現代っ子の気質に寄り添う授業を探し求める必要がある。そこでの感覚刺激した結果を文章や言語として再構築させ、自己の感性に気づかせなくてはならない。

そこで、55年前受けた私の師の授業の中から、『完成法』³⁴⁾による試みをそのまま借用し、俳句創作へと誘う学習として取り扱った。ここで、学生に俳句を作らせようと、いきなり「今日は皆さんに俳句を作ってもらいます。最近出会ったヒト・モノ・コトの中から、さあ自由に作ってみて下さい」と、一方的な課題を与えても学生はまず乗ってこない。そこで、教師からの一方向による「教える学習」から学生側が主体となり、積極的に参加する「誘う学習」への転換が意味を持つことになる。

以下は、俳句創作へ向けての指導案ならぬ誘導案である。紙面の都合でダイジェストしながら当日の流れを紹介する。

バスの中いくつもの()の陽が入る²⁵⁾

と板書する。そこでやおら・・・

「さあ皆さん、右の句を何度も何度も読んで、場面・自分だけの世界を想像して下さい。多分ですが・・・この作者は、ある日ある時バスに乗ってどこかへ出かけているのでしょうか。そのバスの中に窓を通して斜めの太陽の光が差し込んできています。作者には窓を通したその光がいくつも見えています。したがって、車内の乗客は多くはないようです。と、勝手なことを言っていますが、私以上皆さんは、この句から浮かんでくるモノがあると思います。さあそこで皆さんにお尋ねです。皆さんだったら、このカッコの中に「春」「夏」「秋」「冬」のどれを入れて完成させますか？ また、なぜその季節を入れたのですか、理由もできるだけ詳しく教えてください」と発問しおよそ5分で学生は反応とまとめを終了した。結果は次のようになった。

春・・・17名 夏・・・16名 秋・・・23名 冬・・・8名

そこで同じ季節を選んだ者でグループ（今回は春・夏・秋グループを2つに分け、全体で7グループとした）になり、めいめいその理由を披露する。みんながグループ内発表を済ませた頃を見計らい全体発表に移る。ここではグループ内で出た理由を、いくつか絞りに絞りに代表者に発表してもらった。そこでは次のようなものが挙がってきた。（発表の一部のみ）

『春』を選択

- 中学・高校とバス通学をしました。春はたくさんの希望と期待があり、私にとって一番の思い出が残っているからです。
- 「日」ではなく「陽」が、なんだかぼかぼか陽気を思い出させます。またこれには寒い冬が終わり、春を迎えほっとした様子が伝わってきました。

『夏』を選択

- もうすぐ夏休みに入る高校生です。今日も部活動で汗をいっぱい流しました。学生はいつもと変わらぬ元気でバスに乗り下校しています。部活の話で盛り上がっているバスの中に、幾筋もの光が重なり入り込んでくる様子が浮かびます。
- 高三の夏休み、祖母のいる故郷に帰りました。そのとき強い日差しがバスの中に入り込んできて、とても暑かったことを思い出しました。この作者も、もしかしたらそういう思い出から作ったのではないかと、「夏」にしました。

『秋』を選択

- この俳句から、私はほんわかとした季節を想像しました。そういう雰囲気を感じた私

は、バスの中に入ってくる光もほんわかとしたイメージです。理由はよく分かりません。なんとなくです。

○秋の暖かさは、なんだかゆっくりと時間が流れているような気がします。このバスの中も、ゆっくりとした様子なのです。そういった場面が私には浮かんできました。

『冬』を選択

○去年の冬のことです。特に寒かったその日、学校から帰っていると、私の座っている席に、外からの陽が入ってきて、とても暖かかったのを思い出しました。

○この俳句から浮かんだ情景は、一人でバスに揺られて帰っている、ちょっとさみしい気持ちになのです。そこから肌寒いイメージがわいてきて、「冬」がぴったりです。

上記の解釈のいずれも、わずか17文字ではあるが、半自作の句を、しっかりと自分の過去の経験を融合させ評している。このように、教室のみんなの雰囲気も少しずつ俳句モードに切り替わってきた。そこで次に完成法のステップ2へと移った。

オルガンも（ ） 鳴っている²⁵⁾

を、想像を逞しくして何としてでも完成するように促した。学生は、先ほどよりも少し困った様子であった。これには何かが引っかかるようだ。それでもみんな精一杯挑戦している。どんな中句が浮かんでくるのか楽しみに待つことにした。その結果、学生たちは次のような言葉を発表した（一部のみ）。

風に揺られて・寒い寒いと・跳ねてるように・ぽろんぽろんと・喜びあふれ・私の心も・静かな夕べに・涙こらえて・心地良さに・にぎやかな街に・小鳥もさえざり・静かな音色で・風に乗っては・眠れ眠れと・スズムシたちも・タラントラント・喜ぶように・こっそり静かに・午後の音色で・夢を見ながら・流れるように・心豊かに・カスタネットも・るんるん楽しく・風に染まって・春の音色で・子に手を広げ・負けじとばかりに・眠たそうに

ここでの難しさは、「オルガン」の後の「も」が原因しているようだ。「は」であればいくつもできるのだが・・・という呟きが聞かれた。しかしここは「は」でやると形骸（無詩感）俳句に流れ易い。敢えて「も」でやるべきだろう。右の中句を入れた理由について、幾人かを指名しその理由（場面）を紹介してもらった。いずれも学生一人ひとりの持っている世界が披露されみんなに伝わっていった。ステップ2のやや苦しかった後のステップ3は少し柔らかくいくことにする。とは言え、その柔らかさの中にも頭のフル回転だけは休ませない。

ステップ3では、俳人・坪内稔天氏のユニークな口語俳句の一部を虫食い状態にし、完成法教材として使わせていただいた。若い学生の感性にフィットすると考えたからである。

たんぽぽのぽぽのあたりが（ ）²⁶⁾

教室の雰囲気を和らげる何か、この句には潜んでいるらしい。女性が多数のこのクラスでは、虫食いの句であるにも関わらず、ここでのわずかな語群の中に、ほっこり感とクスリと笑みがこぼれるリズムが混然と一体化し、若い感性に響くものがあるようだ。加えて、学生たちはここに俳句世界の広がりや、はたまたその中の意外性を見つけはじめたのかもしれない。次のような下句が披露された。一つひとつをあてはめながら、私がゆっくりと読み上げていくと、学生の笑顔がなおさら増していくのが分かる。

よく笑う・心地よい・風に舞う・夢見てる・踊ってる・春模様・いとおいしい・絵のよう
だ・温かい・可愛いな・可愛いよ・可愛いね・光ってる・ふわふわと・笑ってる・ゆれて
いる・ゆらゆらと・染まってる・飛んでゆく・歩みだす・散っている・ほっかほか・ぼぼ
ぼぼぼ・風に乗る（一部分のみ）

ここで披露された下句には、かなりの重なりがあったのも事実である。それはそれで良しとしなければならない。「たんぽぽ」「ぼぼ」という言葉の響きに心が動くとともに、何かに気づいた自分の世界を表現している姿が垣間見える。ここでのステップ3を踏んだことは、本日の授業の最終目的である自作句作りへと誘う効果は大きかったようだ。

俳句世界を自分なりのイメージで捉え始めた後は、いよいよ本番である。残り25分間を使い、原稿用紙にできるだけたくさんの自作句を作るよう促した。チャイムが鳴るまで学生の苦しみつつも真剣な姿が印象に残っている。提出された原稿用紙に書かれた句の一部を紹介する。

- ・水中に険しい顔が透けている
- ・新しき恋に恋して微笑むわたし
- ・純白の小さき花の息づかい
- ・帰り道一人ぼっちの秋の暮れ
- ・しばらくは恋を羨み石を積む
- ・気まぐれな秋の声する日暮れ時
- ・犬連れて風に追われる遊歩道
- ・焼き芋をほくほく食べては母想う
- ・夕焼けの中今日は寄り道しようかな
- ・街路樹に風吹き抜ける秋の朝
- ・金木犀が故郷の想いを連れてきた
- ・大輪の生命を咲かす夢を見る
- ・秋の日は少し焦げたる我が想い
- ・食卓を明るく染めた皆の頬
- ・日に透けてコスモスの花揺れに揺れ
- ・病む人の微かな笑みを連れ帰る
- ・雨上がりそれでも覚めない恋心
- ・秋の山匂いも確かに流れてる
- ・こめかみに雨だれ一つ我は生く
- ・乳母車押して伝わる命かな
- ・流星を眺めて祈る秋の夜
- ・風の中すれ違い行く東ね髪
- ・満月が疲れた心癒す夜
- ・赤く染まったうろこ雲と帰る
- ・老いし祖母を電話で聞いている白い声
- ・思い出が風の中ゆく青いまま
- ・島めぐる真っ白な船湾を出る
- ・川面に人影写し秋の空
- ・朝の間の風の中ゆく通学路
- ・夕空に癒えし病を届けてる
- ・いつまでも夕焼け雲を惜しんでる
- ・愛犬に体を寄せて暖をとる
- ・青空をキャンパスにする飛行機雲
- ・道端に花を見つけて笑顔も咲いた
- ・お茶を飲む思い出の空連れながら
- ・故郷の色濃き花を懐かしむ
- ・帰り道ほんのり香る薩摩芋
- ・土砂降りの雨の下でのかくれんぼ
- ・草むらに一輪の花かくれんぼ
- ・独り暮らし遠い空を見上げてる
- ・木漏れ日に色柄も良き若夫婦
- ・風に乗りペダル踏んでる通学路
- ・ことごとく覆したい石の坂
- ・ギリギリソのソロ澄みとおる秋を聴く
- ・秋の暮風に包まれ歩いてる
- ・寒い朝自転車登校坂の道
- ・吹く風の奏でる音に人恋し
- ・遊ぶ子を見れば吹き飛ぶ我が疲れ
- ・焼き芋がつかないでくれた恋心
- ・今日からは希望もいっぱい天高く

いずれも、感覚の総合的な充実かの上ら生まれた詩感の内包された作とは言えないかもしれぬ。が、若々しい学生の荒削りな言葉ではあっても、「表現」の新鮮さは十分に伝わ

ってくる。

(2)『命題法』を試み、詩感の誘う

ここに一篇の詩がある。私はこの詩に初めて出会ったとき、(これは教材になる。いや教材にしたい)と直感した。作者・野田修一氏ご本人に承諾をいただき、早速『感性学』『国語表現法』の授業で使用した。

詩を繰り返し読んでいく内に、ここに登場する父親の二人に寄せる愛情と地球に生きる者のある種の悲哀間つまり内に込められた作者の詩感に、学生がどれくらい共鳴することができるかと考え、そのきっかけになるものとして『命題法』を考えた。あらかじめこの詩の題名を伏せた詩の全文を渡し、学生に何度も読ませる。その内、この詩に自分だったらどんな題名を付けるか、という方法である。この方法を導入に使うことで、学生の読みの深さ・感性の引き出しを

誘った。その詩の全文を次に紹介する。(原文は46行)

『 』²⁷⁾ 野田 修一

物干し場の扉をあけると/幼い日のわたしがいて/無心に天体望遠鏡をのぞいている/
暗闇に向かって/ふるえながら/見つめているのは/アンドロメダ銀河/230 万光年かなたの/
おとなりの銀河だ/ぼくたちはどこから来て/どこへ行くのだろうか/あるとき、突然/この時空
に/放り出された/わたし/どこから来て/どこへ行こうとも/わたしは今ここにいて/わたしと
いうかたちをして/しっかりと地球に立っている/遠い昔/星だったころの記憶を/かすかに
とどめながら/そう/わたしはかつて星だった/星のかけらだったのだ/わたしを構成する元
素が/星を構成する元素と同じだなんて/びっくりするよ/もういちど扉をあけると/背の高
いわたしが立っていて/二人の娘にささやいている/ほら、あれがペガサスの四辺形で/あの
あたりがアンドロメダ大星雲だよ/おお、わたしよ、おまえよ/星の子供よ/やがて遠い旅に
出るんだね/たったひとりで/そうして/宇宙に還ってゆくんだね/宇宙の塵になるんだね/い
つか、また/どこかで会えるだろうか/もはやおまえでなくなったおまえと/わたしでなくな
ったわたしは

ここでの命題法の結果、25名の受講生は次のような題を付けた(カッコ内の数字は同一題の人数)。

繰り返す未来 やがて星になる 命は巡る 宇宙の旅 銀河鉄道 星の子どもたちへ
星の子どもたち(2) 私たちの居場所 あなたはどこからどこへ? 星の家族 星のかけら
生命体 宇宙の星・地球の私 見守っていくよ、これからも 過去・現在・未来 自分とは?
不思議な人生 私の宝物へ 絆 また会える日まで 星だった私と 星となる私
銀河系への旅 広い空間の中で

それぞれ、学生が作者の詩を読みながら、どの辺りに視点を置いているのか、どこに魅かれているのか、この詩全文をわずか一行で表すとすればどのような言葉に置き換えることができるのか、についてうかがい知ることができる。ここでの『命題法』の導入は、詩の成り立ちや、詩を身近な文学的表現であることに気づいてほしかったからだ。

ここでの「命題法」の試みは、学生の視点や立ち位置の傾向を知る手がかりを得ること

ができる。と同時に、野田氏のここでの詩作を迫体験しつつ、学生自らが、新たな発展的創作へと繋げていく足掛かりを掴みはじめたことを意味する。野田氏から、この全文「詩」のバトンを受け取った 25 名の学生は、自分の持っている様々な既知経験を駆使し、次なる表現者となる。

具体的な批評精神（批評の立場）に戻る。

この命題法が、鑑賞や批評の手がかりとして重要視できるのは、命題者が、この詩から最も強いインパクトを受けた語（群）が、詩の中のどの辺りにあるのか、客観視できることにある。ここにこそ「気づき」から新たな「表現」へと移行する姿がある。これは、一片の詩に迫ろうとする自分自身の姿を探求する足掛かり、と言い換えることもできる。

学生から提出された 25 個の『題』は、その視点や立ち位置から分類すれば、次のような意識の存在あるいは傾向に気付かされる。

- ① 宇宙と人間を対比的に見ている（並立性）
- ② 人間という視点から宇宙を眺めている（内発性）
- ③ 宇宙を巨大な生命に置換して自己を見つめる（外発性）
- ④ 親と子のタテの繋がりを意識して見つめようとする（時間性）
- ⑤ 右の①～④どれにも属さない（独立性）
- ⑥ 右の①～④が絡み合っている（混在性）

おおよそ、これら 6 つの傾向がある。

ここにも「気づき」から「表現」へと自己の「感性」を発露している姿が見てとれる。学生たちは、この「命題法」の試みに次いで、「なぜ、その題名に行きついたのか」を中心に、作者の詩を次のようにおおよそ 200 字で批評している（ここでは 6 名の学生の評を掲載する。またその文中に「感性」の顕れた場面と思しき部分にアンダーラインを引いた）。

「星の子どもたち」 我々人間の身体は、やがて滅んでなくなってしまう。しかし、自分を構成した元素（星のかげら）は、昔、星であった自分の子どもたちへ、そしてまた次の子孫たちへと受け継がれていくということを、この詩を読んで感じた。作者は、この詩の中で、昔の自分と、今子どもたちと一緒に立っている自分を比べている。その中で、時の流れを少し悲しく思っているのだ。読めば読むほど引き込まれていった。

「銀河系への旅」 とてつもなく壮大な銀河の世界が広がってきます。この詩の一行々々から、解き放たれた神秘の世界を感じます。我々という生命は、何億年もの間、姿かたちを変えて生きぬいてきて今があります。時には自然の怒りに触れ、恐れおののいたり、時には戦争の悲惨さに深く悲しんだりしながら。しかし、その度に人間の心を取り戻し、新たな扉を開いて、今日まで生きてきました。この詩の一行々々が、我々現代人の生きづらさから解放してくれるような癒しの言葉です。

「宇宙の星・地球の私」 私が今ここにこうして存在するのは、単純に考えれば、父と母が居たからということもできる。しかし、この詩を読むうちに、それ以上もそれ以下も私は考えてみたいと思い始めた。私はどうして今ここに生きているのだろうか。これを突きつめて考えると、最終的には宇宙の存在にたどり着く。そこに気付かせてくれた野田さんの「私たちが星であった」という考えはとてもおもしろい。あの星のように生きていけたら、どんなに辛いことも悲しいことも、案外たいしたことではないのだ。これからも、私は宇宙

と繋がって生きていきたい。

「**私たちの居場所**」人間と星を対峙させ表現されているところに、まず驚いた。まるで、人間と星が会話しているようだ。実際にこんなことはあり得ないわけだが、このお互いの問いかけが面白い。星は、人間よりはるかに大きいのが、野田さんの詩では、その差を少しも感じさせない。人間と星とが身近な関係にあることを感じさせてくれる。地球上で生きている今、私たちはさらに視野を広げ、周りの人の役に立とうとしなければならない。そのことを改めて感じさせてくれたこの詩に魅了される。これは、わたしの居場所を見つける旅でもある。

「**また会える日まで**」作者（野田さん）の家は、奥さんと二人の娘に恵まれた四人家族だ。この詩には、作者の幼い日の疑問や、自分をはじめ我々人間が死んだ後の世界について、考えたことを述べている。中でも、死後の世界で、仲良しの四人家族がバラバラになることを寂しく悲しいと思っておられる。しかし、いつかどこかで四人がまた会える日が来ることを願っておられるのだ。それほど自分の家族を大切にしておられることが、切々と伝わってくる。私も自分の家族が好きでたまらない。読めば読むほどこの詩が好きになっていく。

「**命は巡る**」野田修一さんのこの詩は、読む人にいろんなことを考えさせてくれる作品だ。私は一回読んだだけではよく分からなかったので三回読んでみた。そうするうちに、この作品を二つのパターンで解釈していた。一つは、かつては星だったはずのものが、突然時空に放り出され、人間になったということ。もう一つは、星だった私が、次々と扉を開け、過去の自分、つまり巡り巡ってくるこの命を見ていることだ。周りの友だちには、もっと他にもさまざまな読み方があるだろう。このように、読む人のタイプによっていろんな解釈ができる作品を面白いと思った。

俳句・短歌・五行歌・詩、いずれの鑑賞も、私の授業では、学生が作品を傍観者的に眺めて評することを避けるように誘導してきたつもりだ。その結果、ここに見られるように、学生は、批評するというより作品の中に自身を埋没させ、作者（野田氏）に成りきろう・近づこう・語りかけようとする。どの学生も、飾りつけなしの自分を、200字原稿用紙にさらけ出している。

この「さらけだし」のプロセスで、学生は過去に獲得した自前の語彙群の引き出しから、あれこれと今の自分の思考・詩感に合致する言葉を見つけ始める。時にサイズの合わない衣装にもどかしさを感じながら、新たなそして高次の段階へと向かい「表現」の方法を求めていく。

(3) 『陶器と磁器を感触で味わう』

学生は一体「磁器」と「陶器」の違いをどれくらい気付いているのだろうか。現代っ子にとって、その焼き物の違いについて、家庭でも語ってくれる者が少なくなっているのではなかろうか。このようなさまざまな時代の変化（流れ）は、若い時代の「感性」をどこかで停滞させているのではなかろうか。

そのような現状を予想し、『感性学』の受講生を対象に、器を実際に触らせ・音色を聴かせ、陶器・磁器の基本的な違いを発見させたかった。次はその時の様子や学生の気づき

を述べたものである（この場面はおよそ 30 分間の流れである）。

- ① 磁器・陶器・ガラス器の花瓶を 5 個卓上に並べる（この時点では 3 種類の名前を学生には教えない）
- ② 見た目の気づきを発表する
- ③ 一つひとつの器を両手で取り上げ伝わる感触を確かめる
- ④ 一つひとつの器を取り上げ、金属棒でその側面を叩き音色を確かめる
- ⑤ 自宅で日ごろ使っている器はどちらが多いか尋ねる
- ⑥ 磁器・陶器・ガラス器の簡単な歴史を紹介する
- ⑦ 個人的には磁器・陶器のどちらが好きかを訪ねる
- ⑧ 本日の気づき・学びを 200 字レポートにまとめる



磁器・AE 陶器・BD ガラス器 C それぞれの花瓶を眺めたり感触を確かめたりしている

やや急ぎ足の授業ではあったが、今回、触覚を覚ましての授業だったからか、学生の印象は、これまでの『感性学』の授業よりもさらに目が輝いているように思えた。

「器」 目から入る美しさ、手触りで分かる土の感触など、視覚や触覚のさまざまな観点から触れた。そこでは陶器や磁器からさまざまな感情が湧き出て来る。私は、陶器を見た瞬間から心がときめいた。磁器に比べると、色に華やかさはなかったが、見ただけで「土」という自然な感じが伝わり、どこか心に重くのしかかったようで安心する。器は、使う人によってどこか心を落ち着かせ、その人の心に寄り添ってくれるようだ。

「陶磁器」私は磁器に魅かれる。つやつやして見ても華やかだからだろうと思う。実際に家にある花瓶も、磁器の方が多く見慣れているからかもしれない。しかし、陶器の素朴さも風情があって好きだ。陶器が磁器に比べ叩いた時の音が低いことや、磁器の音は金属音がするという特徴も今日分かった。

「磁器に魅かれる」私はどちらかというとも磁器に魅かれる。磁器の方が見た目に綺麗だから、無意識のうちに選んでしまうのは磁器だ。見た目にシンプルなところに惹きつけられる。とはいえ、陶器は陶器で重みがありしっかりとした感じがする。時間をかけて作られたのだろうか。磁器は叩くと高い音がした。「軽そう」「綺麗」「シンプル」に魅かれる自分を発見した。

「それぞれの魅力」最初は磁器の方に目が行きましたが、陶器・磁器を何度も見比べているうちに、陶器には何とも言えない味があり、心が落ち着く自分がいました。磁器には表面がつやつやして綺麗だし、陶器にはどっしりとした落ち着きを感じます。陶

器・磁器どちらにもそれぞれ魅力がある。これも感性がさまざまだからだと思います。

「**自分の好み**」私が好むのは陶器だが、自宅で普段使っている食器は、磁器の方が圧倒的に多い。子どもが小さい頃、小石原焼の湯飲みを落として割ってしまい、とても残念に思ってから、食器は普段、磁器を使っている。陶器は、質感や色味の渋いところが好きで、マットな手触りがとても良い。模様や柄も独特で、将来は少しずつ普段に使える陶器も揃えたいという願望がある。陶器市があったら足を運びたい。

以上は、5名の学生の授業後の「気づき」「学び」である。ここでは5人の学生のレポートをみただけであるが、この中のアンダーラインの部分に、それぞれの学生が持っている感覚器官を通じた結果の「気づき」を「表現」している姿が見える。

このように、人はさまざまな感覚を通すことで、言葉・墨・絵具・粘土などさまざまな媒体を用いて表現活動を行いたがるものではなかろうか。

（6）仮説の検証結果

今回は、さまざまな感性誘発授業の内、(1)完成法(2)命題法(3)感触（触覚）と聴覚による気づきを確認する、4つの学習法をここでは報告した。いずれもそこには学習者の五感や言葉からの情感を総合し、自分なりの方法で感情豊かに表現している姿がある。

このような姿を見れば、「感性」が「感受性」のように単なる受け身で終わってよいはずもない。ここで求められるものは、あくまでも学習者自身が、自分の五感で「感受」し、次には学ぶ側が主体者となり、外に向かい発信するという表現活動へと高めていくことだ。自己の学んだ新しい感性の存在を自分なりの表現方法で、外に向け発信してこそ初めて「感性」が育ったと言えるのだ。

3. 結論

「感性」とは、感覚器官が受動的に作用している状態ではない。その感覚器官をもって外部のさまざまな事象に気づき、新たに自己を表現するところまでを含むものである。したがって、単に「気づく」ところで留まらず、気づいた先に自分なりの表現方法をもって外に発信してこそ「感性」となり得る。もちろんのことだが、表現の方法はさまざまだ。

「感性とは、感覚を総合させた気づきを感情豊かに表現することである」

「感性」の語意を説明するのであれば、私は今このように考えている。そして、これを「感性の原理」としたい。

4. 今後の課題

教育・芸術・文学をはじめとして現代においてはさまざまな分野で「感性」の大切さが叫ばれ始めている。とはいえ、「感性」が何たるかを明確に定義づけたものは無い。しかし、これを曖昧なままにして、児童生徒学生の「感性を育てる」ことはナンセンスと考えるべきである。これをないがしろにして、「感性」の何たるか、「感性」の育て方を探ることに無力感を残す。

「感性」を重要視するのであれば、まずは「感性」の原理研究こそ急務である。私の「感性」の原理研究は、今まさに端を発したところである。私自身これからの研究過程において、さらに新しい原理を求めて揺れ動いていくことだろう。今回この論をまとめるにあたり、

- 1) 「感性」に、はたして善と悪とが存在するのか
- 2) 「感性」と「理性」の相関もしくは優先順位をどう考えるか
- 3) 「感性」の表現価値を誰がどのような方法・立場で認定できるのか
- 4) 「感性」の哲学的分析

これらの新たな4点を今後の課題としたい。

参考文献および図書

- 1) 西日本新聞2020年11月20日夕刊1面『脱都会離島の高校で伸び伸び』
- 2) 藤原辰史『次の世代、子孫のために』岩波書店・図書12月号P25下段
- 3) 読売新聞2020年12月5日朝刊26面『〇〇さん小説部門入選』
- 4) 麻生美智子『さわやかな感性の風』内外教育5764号、2007年9月7日発行
- 5) (カント)『判断力批判』岩波書店・カント全集8、1999年
- 6) 遠藤友麗『教育と医学』第53巻11号、巻頭随筆「感知融合教育のすすめ」、2005年
- 7) 増山英太郎『感性はどうしたら磨けるか』P22 ごま書房新社、1989年
- 8) 加藤寛二『都市感性革命』P97 文芸社、2009年
- 9) 桑子敏雄『感性の哲学』P32 NHKブックス914、2001年
- 10) 片岡徳雄『子どもの感性を育む』P74 NHKブックス603、1990年
- 11) 中村明『語感の辞典』P224上段 岩波書店、2010年
- 12) 小林 宏『感性学入門』産能大学出版部、1990年
- 13) 中川弘泰『感性を育てる教育』P37 信州教育出版社、2013年
- 14) 倉戸ツギオ『体験学習と感性教育』明治図書出版、2001年
- 15) 兵庫教育大学附属中学校教職員 『研究発表会資料』
- 16) 牧野昇『知性・感性・邪性』P21 東洋経済新報社、1997年
- 17) 桐田敬介『感性を働かせながら』日本美術教育学会、2010年
- 18) 文科省『幼稚園教育要領』フレーベル館、2008年
- 19) フリー百科事典『ウィキペディア』
- 20) 三省堂『大辞林 第2版』1988年
- 21) 岩波書店『広辞苑 第4版』1991年
- 22) 集英社『国語辞典』
- 23) 『新明解国語辞典』・第5版
- 24) 岩波書店『国語辞典第8版』2019年
- 25) 石井義武『勉強の仕方の研究』岩波ブックセンター信山社、1985年
- 26) 坪内稔典・句集『ぼぼのあたり』沖積舎、1998年
- 27) 野田修一・詩集『解決されない和音』海鳥社、2009年